第7章

東京2020大会後のレガシー

東京2020大会は思い描いていたものとは大きく異なる大会となりました。しかし、大会を通して得たさまざまな経験やつながりが、将来に引き継いでいくべき貴重な「レガシー」として、私たちの手に残りました。

1つ目はオリンピック自転車競技ロードレースです。テストイベントと東京2020大会の2回、多くのコースサポーターがレースを支えました。

2つ目はパラスポーツの一つであるボッチャの普及です。共生社会を体現したともいうべきボッチャを通した交流は、互いの違いを認め合い共に生きる社会の広がりを見せています。

3つ目は、アイスランド共和国との出会い、交流の始まりです。交流を継続させ、深めていくために「駐日アイスランド大使館と多摩市との友好協力関係に関する覚書」を締結しました。

4つ目は夏期巡回ラジオ体操・みんなの体操会の流れを汲んだ「楽しく! 美しい! ラジオ体操教室」が地域に根差した活動として定着し、市民の健康づくりが促進されたことです。

そして、オリンピックが目標とする「人間の尊厳の保持に重きを置く社会の推進」に向け取り組むことの大切さを、オリンピックが開催されるたびに思い起こすことこそが、東京2020大会のレガシーとなります。

東京2020大会後の取組

多摩市では、東京2020大会の開催がもたらすさまざまな効果が、市民にとって、また本市にとって、後世に引き継ぐ価値あるレガシーにつながるよう、取組を進めてきました。

大会後においても、大会開催を契機として生まれたレガシーの芽を未来に引き継ぎ、将来にわたる多摩市の発展の原動力となるよう、取り組んでいきます。

取組方針での位置づけ		取組内容
【改訂】	重点目標１ まちの魅力発信	**○東京2020大会のレガシー創出** レガシーとなる事業等の実施、実現に向けた検討 ・レガシーとしての自転車ロードレース大会 ・スポーツボランティアの組織化
【改訂】	重点目標２ 共生社会の推進	**○ボッチャによる交流** ボッチャを通じた多様な人たちの交流を促進するためイベント等を開催 **○多摩市ゆかりのオリンピック・パラリンピック（候補）選手応援プロジェクト** これまでの応援活動を継続
【改訂】	重点目標３ 国際交流の推進	**○アイスランド交流事業** アイスランド共和国のホストタウンとして、「友好協力関係に関する覚書」を締結した駐日アイスランド大使館のパートナーとして、交流を継続・発展 ・アイスランド・ウィークの開催 ・（仮称）アイスランド交流事業関係課長会の設置　等
【再改訂追加】	オリンピック・パラリンピックムーブメントの推進	**○オリンピック・パラリンピックムーブメント推進事業** 国士舘大学等と連携し、オリンピック・パラリンピックムーブメントの推進のためのオリンピック等の理念の普及・啓発、オリンピック・パラリンピックを契機とした市民の健康づくり活動の地域連携に、引き続き取り組む ・オリンピック等に関するセミナーの開催 ・コミュニティセンターにおける「楽しく！美しい！ラジオ体操教室」の実施支援 **○市内６大学との連携の継続** オリンピック・パラリンピックの開催を契機とする市内６大学（大妻女子大学、恵泉女学園大学、多摩大学、国士舘大学、桜美林大学、東京医療学院大学）との連携を継続

レガシーとしての自転車ロードレース大会

多摩市における東京2020大会に係るできごとの中で、市内がオリンピック自転車競技ロードレースのコースになったことは大きな柱のひとつです。

新型コロナウイルス感染症が出現する以前、「東京2020大会まであと1年」となる2019（令和元）年7月21日、本番さながらにテストイベントが開催されました。東京2020オリンピック自転車競技ロードレースのコースは4都県を貫き、これまでに経験したことのないような大規模な道路交通規制を伴って実施されることから、競技運営上の課題の検証のため、本番と同じ時期に本番と同じコース（富士山山麓方面ルートを除く。）で実施されました。自転車競技ロードレースは日本ではまだ認知度が低く、あまりメジャーなスポーツとは言えない状況にありますが、日常生活道路として使用している市内の道路でレースのために道路交通規制が実施され、トップレーサーが疾走する様子を目の当たりにしたことで、結果的にこのテストイベントが最大の気運醸成イベントとなりました。

東京2020大会でも、オリンピック聖火リレーの公道走行が中止となり、集客を伴うイベントが軒並み中止となる中、自転車競技ロードレースは「沿道での観戦自粛」を呼びかけながらも、競技自体は予定どおり開催されました。

市内の道路が「オリンピックコース」となったこと、また、テストイベントと東京2020大会の2回のレースを支えた経験とコースサポーターという財産を活用し、東京2020大会のレガシーとしての自転車ロードレースの実施に向け、南多摩尾根幹線道路の全線4車線化の整備工事の進捗状況、また、東京都など他の自治体でのレガシーとしての自転車レースの検討状況を踏まえながら、検討を進めていきます。

スポーツボランティア

2019年のテストイベントと東京2020オリンピック自転車競技ロードレースでは、コース設営や観客誘導などの競技運営のサポートをしていただくボランティアとして、市内のコース沿道で多くの「コースサポーター」に活動をしていただきました。

また、オリンピック聖火リレーの実施にあたり、コース設営や観客誘導などのサポート、出発式会場の運営補助等を担っていただく「聖火リレーサポーター」も募集しました。多摩市内の出発式及び公道走行の中止に伴い、実際に活動いただくことはできませんでしたが、多くの方にご応募いただきました。

東京2020大会終了後にコースサポーターとして活動いただいた方に行ったアンケートの結果では、コースサポーターの活動への参加に98%の方が「参加して良かった」、今後のスポーツイベントのボランティア活動の募集に対しては、59%の方が「参加したい」と回答、「参加したくない」は1%となっています。また、聖火リレーサポーターにご応募いただいた方へのアンケート結果でも、今後のスポーツイベントのボランティア活動の募集に対して、47%の方が「参加したい」と回答、「参加したくない」は1%となっており、ボランティア活動への意欲の高さが表れています。

スポーツボランティア制度は、多くの自治体で創設されており、都内自治体では、2013年東京国体を契機に創設されたケースが多く見られます。多摩市でも、東京2020大会を通して高まった、地域でスポーツイベント等を盛り上げていく気運を一過性のものとせずに将来へつなげていくため、市が主催・後援するスポーツイベント等の企画・運営をサポートすることで、市民がスポーツを楽しむ環境をつくり、活気のある地域社会を実現することを目的としたスポーツボランティアの制度化を目指します。

銘板の設置

東京2020大会において市内で実施された競技は、オリンピック自転車競技ロードレースのみでした。市内11.8kmの公道がオリンピック競技の会場となり、世界のトップレーサーが駆け抜けました。中でも多摩東公園交差点は、都内で唯一2回車列が通過したポイントで、市内のコース上で最も象徴的な場所であることから、多摩市内で東京2020オリンピック自転車競技ロードレースが実施されたという事実を後世に伝える銘板を多摩東公園内に設置しました。

銘板は東京都内沿道自治体で共通のデザインとなっており、この地がオリンピックコースであることを市民や多摩市を訪れる人々に伝えています。

自分たちのまちでオリンピック競技が開催されたということがシビックプライドの醸成に繋がり、来街者に対してはシティセールスとなること、また、この銘板が人々の目に触れることにより、自転車競技に興味・関心が高まり、競技人口が増加することや地域のスポーツ振興につながることが期待されます。

銘板文章

適度な起伏があり、正面に富士山を望む景色を楽しめることから、多くのサイクリストに親しまれている南多摩尾根幹線道路（通称:オネカン）を含む市内11.8kmの道路が、東京2020オリンピック自転車競技ロードレースのコースとなりました。

レースは、2021年7月24日に男子が、翌25日に女子が開催されました。ここ多摩東公園交差点は、東京都内のコースの中でも唯一、選手たちの車列が2回通ることから、観戦ポイントの一つとして多くの方から注目されました。選手たちは、ゴールの富士スピードウェイを目指し、オネカンを疾走しました。

ボッチャによる交流

障害の有無や年齢、性別が違う者同士でも一緒にプレーできるスポーツであるボッチャは、市内小中学校のオリンピック・パラリンピック教育の中で取り上げられたことなどを通して、今大会を契機に急速に広まった競技と言えるでしょう。誰でも取り組めることから、学校だけでなく、企業が協賛した大会が開催されたり、部活動ができたりするなど、裾野が広がっています。

東京2020パラリンピックでは、日本の杉村英孝選手が個人（脳性まひBC２）で日本のボッチャ史上初の金メダルを獲得、団体は銅メダルを獲得し、リオデジャネイロ大会の銀メダルに続く2大会連続のメダル獲得の快挙に日本中が沸きました。

市内でも、さまざまな主体（地域・学校・大学・福祉・スポーツ・企業・行政）が連携して実行委員会を立ち上げ、ボッチャ2020TAMAカップの開催へ向けた動きがありました。盛大なプレ大会の後、新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年に予定していた本大会は実施できませんでしたが、多摩市スポーツ推進委員協議会主催の第1回多摩市ボッチャフレンドカップが感染拡大防止対策を講じた中で開催されました。東京2020大会後に行われた第2回大会も定員を超えるエントリーがあり、申し込みを締め切るなど、ボッチャは地域に根付いた活動となっています。2021年になって、ボッチャ2020TAMAカップ実行委員会も再始動し、東京2020大会以前にも増して、開催への関心と期待が高まりつつあります。

東京2020大会を契機に活発化した取組を今後も引き続き継続し、ボッチャを通して多様な人たちの交流を促進し、共生社会の推進を図ります。

アイスランド交流事業

プロモートアイスランドより

2019（令和元）年12月27日、多摩市は全国の自治体として初めてアイスランド共和国のホストタウンとして登録され、東京2020大会においては、市内でアイスランド共和国オリンピック選手団及びパラリンピック選手団の事前キャンプが実施されました。

東京2020大会の事前キャンプは、日本国内で生活しているアイスランド人がわずか50人（2020年6月、法務省在留外国人統計）という中、地理的に遠く離れ、時差9時間と生活時間も大きな違いがあるアイスランドの方と直接交流できる機会として大きく期待されていましたが、コロナ禍の中での開催となったため、選手たちには感染症対策として厳しい行動制限が課され、残念ながら予定していた歓迎レセプションや市内滞在中の通訳案内を担当する市民スタッフとの交流など、市民と選手団との直接的な交流はほとんど叶いませんでした。

大会後においてもなお、未だ新型コロナウイルス感染症のパンデミックは収束せず、海外への渡航をはじめ、人々の交流には大きな制限がある状況にあります。そこで、2021（令和3）年12月13日、まずは駐日アイスランド大使館とスポーツ、文化、教育、ビジネス等の分野において実施するイベント、プログラム等を通じて、様々な交流を育てることで、両者の良好な関係と友好を深めていくことを目指し、「駐日アイスランド大使館と多摩市との友好協力関係に関する覚書」を締結しました。今後は、アイスランド独立記念日である6月17日の週を含む9日間（当該週の前後の週末2回を含む）を「アイスランド・ウィーク」とし、毎年定期的にアイスランドを理解し学ぶ恒例行事として開催していくとともに、男女平等社会に向けた啓発と交流やアイスランドと多摩市の学校間の恒常的な交流などを進め、新たな交流事業への発展、さらに交流が定着した段階においては、アイスランド共和国本国との直接交流の実現を目指し、交流を継続させ、深めていきます。